

こらっせ便り

2021年10月16日



【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」

TEL : 045-353-9008、 eメール : info@korasse-kanagawa.org

Web サイト : <http://korasse-kanagawa.org/>

「山北プロジェクト」を企画しています

福島子ども・こらっせ神奈川事務局長 遠野 はるひ

「こらっせ」は①子どもたちの未来のために、②フクシマを忘れないというミッションの下、活動の第1の柱としてリフレッシュプログラム、第2の柱として大学生の檜葉町児童館派遣を実施してきました。そして、第3の柱として昨年秋から「山北プロジェクト」の企画を模索してきました。自然豊かな山北は川遊び・山登りと遊びの場所ですが、同時に水、森林、農業、気候変動など世界が直面している課題を学べる現場。この山北で、神奈川の子どもたちにも、大学生と一緒に学び・遊んでもらおうというのが「山北プロジェクト」の内容で、「こども食堂」に集う地域の子どもたちが対象です。

「山北プロジェクト」の第一歩として、山北町をもっと知ってもらおうと、昨年10月、11月、今年3月に若い世代の山北ツアーを実施。次に3.11への追悼イベントでもあった「希望の若芽プロジェクト」を通して、「こども食堂」の様子を学び、どのようなコラボが可能なのか探りました。そして、この秋から山北への1日ツアー、来年からは1泊ツアーを計画していましたが、コロナ第5波による子どもたちへと感染拡大懸念もあり、またまた計画の中止を余儀なくされました。

オンライン講演会の開催

このような時は原点にもどり、「子どもたちの未来のため」に、今、何が必要なのかを考える必要があると考えます。そこでオンラインの講演会を11月21日に開催することにしました。講師は横浜市栄区在住の加藤彰彦さん（沖縄大学名誉教授）です。野本三吉のペンネームで、子どもに関する多数の著書を書かれています。

加藤さんは、小学校教師、寿町の相談員、児童相談所のカウンセラーとして現場に身を置き、沖縄大学で教鞭をとられた時は行政や市民と協力して沖縄の子どもの貧困を調査し、施策を提言し実行されています。半世紀以上も子どもの人権をテーマにして活動されてきた加藤さんの到達点をお聞きしたいと思います。申し込み方法などの仔細は同封のチラシをご覧ください。

みなさまの参加をお待ちしています！

「希望の若芽(ワカメ)プロジェクト」報告

福島子ども・こらっせ神奈川事務局

3.11 から 10 年目の追悼イベントに何かできないかと考えたが、現実にはコロナ第 3 波のただなか。企画を思案し行きついたのが、三陸の採れたてワカメを「こらっせ」のネットワークで販売し、子ども食堂に配る「希望の若芽プロジェクト」だ。

3.11 の直後、津波や原発事故の被災者のために多くの人々は何かしたいと考えたが、私たちもできることを探し出して働いた。その一つが横浜から気仙沼市にボラバスを出していた友人に頼まれたワカメの販売だ。気仙沼の岩井崎漁港も津波に襲われたが、高台に貯蔵していたため無事だった 3 月 10 日に採ったワカメを、後に「こらっせ」を立ち上げる仲間とともに販売し、大量のワカメはわずか数日で売り切れた。

昨年、元「こらっせユース」で、現在は被災地のために働こうと岩手県に移住している石渡博之さんが、岩井崎漁港から 10 数 km の陸前高田市広田漁港でワカメ漁師になっていることを偶然知った。石渡さんの採ったワカメを「希望の若芽」として販売し、その利ザヤで購入できるワカメを福島・神奈川の「子ども食堂」に届け、追悼イベントにしよう。こうして「希望の若芽プロジェクト」がスタートした。

ワカメの販売・配布先は、コロナ禍もあり冷蔵保存という制約もあったので、数量を限定し無理なく手渡せる範囲で実施しようとした。1 袋 300g のワカメ 160 袋を販売し、得た利益などで購入したワカメを子ども食堂に 3 袋ずつ 90 袋、合計 250 袋を注文、販売、配布する計画をたてた。美味しいと評判で短期間で売り切れた。子ども食堂への配布先は、横浜を中心に福島・横須賀・藤沢・相模原の 30 カ所。福島の 2 施設を除いてスタッフが直接届けた。

ワカメで広がったネットワーク

ワカメの販売・配布を通じて、今までお付き合いのなかった方たちへとネットワークが広がった。「子ども食堂」へのコンタクトについては、パルシステム神奈川・生き生き市民基金など旧知の組織、今回初めてお世話になった社会福祉協議会からフードバンクや子ども食堂を紹介していただいた。現場を訪問すると、子ども食堂といっても様々な形があり自分たちにあった方式で運営されていて、コロナ禍の現在は感染を回避するために、お弁当やパンドリー（食料配布）などに取り組んでいることを実感できた。

実は「希望の若芽プロジェクト」には、現在企画中の「山北プロジェクト」と関連するもう一つの目的がある。「山北プロジェクト」は、福島だけではなく神奈川の子もたちも、自然豊かな山北で大学生と遊び・学んでもらおうという内容だ。「希望の若芽プロジェクト」はこの新プロジェクトへの第一歩だ。



地域に開かれた子ども食堂へ

元こらっせユース 吉本 海聖

昨年度までこらっせユースとして活動していた吉本です。私は大学時代に子ども食堂について調べたり、ボランティアとして参加させて頂いたりしたことがあります、今後こらっせが子ども食堂にも活動の幅を広げるとのこと、私が大学時代経験して考えたことについてお伝えしたいと思います。

私は、高校生の時から子どもの貧困対策に興味があり、子ども食堂の存在も貧困対策として新聞に載っていたことで知りました。しかし、実際に子ども食堂に行き、運営している方から貧困対策として始めたのではないことを伺いました。地域住民のつながりが薄くなっていることから、地域の横のつながりを作ることで住民同士の助け合いが活発になればという思いから始めたとのことでした。



大学時代、グループ学習のテーマに

大学に入り、孤立が心身の健康や貧困に大きな影響を与えることを学び、貧困対策としても孤立対策としても子ども食堂という活動が広がるといいと考えました。そして、大学の授業の一つであったグループでの調べ学習のテーマとして、子ども食堂を広める方法について検討することにしました。

調べていく中で、多くの子ども食堂が個人や民間の団体によって運営されているために、資金繰りや人材と場所の確保が課題であると知りました。そこで私のグループでは行政が子ども食堂を運営することでそれらが解決できるのではないかと考えました。しかし、行政が運営するには利用対象者が限定されてしまったり、貧困対策のイメージが強くなってしまったりというデメリットが考えられました。

元々の子ども食堂の目的が地域住民の助け合い関係の創出であるにも関わらず、貧困対策として周知されることで、子ども食堂に行く人は貧困だという目で見られてしまうのではという思いから行きづらくなってしまいう可能性があることも知りました。

普通の家庭も利用していて貧困家庭が利用できていないのではないかと批判もありますが、子ども食堂にとって一番重要なことは「地域住民の誰もが気軽に足を運べる場所であること」というお話も聞き、家庭の事情が外には見えづらいことを踏まえると、誰もが利用できること、貧困状態にある人だけでなく地域でのつながりや居場所を求める人が負い目なく利用できるよう誰にでも開かれた場である方がよいのだと感じました。

貧困対策として運営されているところもあるとは思いますが、それだけでない食堂も多いことが社会に周知されてほしいと思っています。

卒業後もこらっせに関わって思うこと

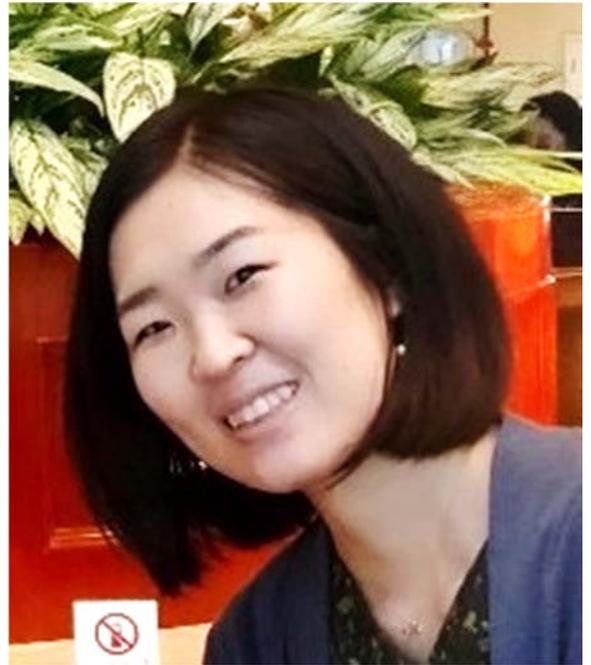
福島子ども・こらっせ神奈川事務局次長 横山 満里奈

みなさん、初めまして。今年から事務局次長となった横山満里奈です。こらっせの活動には、大学2年生でボランティア参加させて頂き、社会人では事務局スタッフとして自分が出来る範囲で関わらせて頂きました。

この2年間はコロナ禍のため、イベントを計画しても延期と中止を繰り返し、思っていたような活動が出来ない時期が続きました。全ての人が同じような状況だったとは思いますが、これだけ誰かと会わない、対面しない、出来ないということは無かったのではないかと思います。

こらっせの活動は、もうすぐ10年目に突入します。この期間に沢山の参加者がいて、沢山のボランティアやスタッフの方がいて、沢山の支援してくださる方が

いました。皆さんとはイベントを通して関係を作る方が多いため、その人それぞれのバックグラウンドを知る時間が無かったなと感じています。ご存知の方も多いかもかもしれませんが、こらっせのスタッフは様々な活動をしている人達が集まっています。個々のお話を伺うと自分が知らなかった新しい世界や解決すべき課題に触れることが出来ます。しかし、そんな社会活動を行う人たちが身近にいる環境は当たり前ではないんだと、社会人になってから気が付きました。



社会活動を通じて知った新しい世界

10年も経つと、私を含めて皆さんが人生の新しいステージに進んでいるかと思います。社会に出てからの何気ない経験は、他の誰かにとって知りたい経験かもしれません。中には、ご自身の興味がある分野で社会活動を始めた人もいるかもしれません。皆さんとこらっせが出会えたことは何かの縁だと思うので、皆さんの活動や卒業後を紹介したり、お互いが何処かで繋がりが持てる機会が作れたらいいなと陰ながら思っています。

このように考えたのは、私自身が事務局スタッフの方が行っている活動にお世話になることがあったからです。大学生時代にはお世話になるとは思いませんでしたが、社会人になって環境が変わると自分に必要なものが変わることを感じました。その活動が今の自分にとって必要なことではなかったとしても、いずれ誰かが必要とする活動かもしれません。いつかは自分が関わりたいと思う活動があるかもしれません。どういう活動を行う人がいるのかを知ることは、自分の興味を具体化させることにも役立つはずです。もちろん、こらっせの活動に関わりたいと思ってくださる方も大歓迎です。会社や学校とは違う、人生の先輩から教わることは非常に多いと感じています。